

戦争は極めて、非人道的な帝國主義侵略戦争であるから、アメリカ帝國主義の即時無条件撤退を要求するものである。安部、沖繩もそれに従ってアジア人民の解放を要求するが故に、その目的、尊厳を要求するのである。基地公署・独占による諸人の地域公署が非常に人民の日常生活の幸福を破壊・損害するが故に、反対せざるを得ないのだ。又その反面、安部、沖繩・基地を維持させることによる利益集積は、人間の名において糾弾されなければならない。圧倒的の人民大衆の犠牲の上にのみくんと尊大に（あくら）をかい算盤をはいしている死の商人達に對する指導は当然に行われなくてはならぬ。大學闘争の甲に厭々と流れている、この人間主義は否定されてはならない、単なる表面的デパート現象だけをみて非難されてはならない。

機動隊導入——封鎖解除——ロケットアクト——投票再開、大学正常化の道は大体このように設定されている。又それが学問の自由であり、大学の自治を守る唯一の正しい道であるかのような幻想を与えている。金共闘派学生機動隊暴力で追放し、おとなしい学生、教職員達で構成する大学は、もはや体制権力を批判・告発することもなく、ラジカルな闘いを社会に懸することはないであろう。又そこには学問の自由は存在しなくなり、恐れおののきのみ存在する、帝國主義大學に象徴してゆくであろう。機動隊暴力に打ち込まれた學園は、人民大衆の利益を阻害し、正常な社会の発展を阻害してしまふのである。

大学の機動隊アレルギーを解消した権力は、今度は直接的に人民大衆にその鋭い刃を向け、民主的權利を剝奪する為には狂奔するようになるであろう。幾多の暗黒の血潮で汚れた民主的權利は、うだかたの如く奪い取られることは、火をみるよりも明らかである。学問の自由や大学の自治は、機動隊には絶対守り得ないものである。機動隊はそのものを告発することから、学問の自由は語られなければならない。政治を批判することは自由でなければならぬ、そのことを完全に制約することから、ファシズムの台頭が始まるのである。暴力鎮圧を排除したことが、大学の自由・学問の自由を保障したことには絶対にならない、体制権力がそれを保障する状態のものでもない、体制権力をゆるがさない限度においての学問の自由、大学の自治は存在するかも知れないが、ひとたび権力批判をすれば絶対には容認しないであろう。

学問は自由であり、言論・結社・集会・表現は自由であらねばならない。何故であらうか。一人一人が一個人の人格としての尊厳があるからには、此のような自由はなければならぬ。それは永い永い人間の歴史が到達した結論なのである。そのことが保障されて人間の解放が可能なのである。人民の幸福が可能なのである。人間の大多数が不幸に陥れられることと反対するのは、正義の戦いと見える。その反対がなければ人間を不幸にしてしまふ。即ち反対することが善であり、反対しないことが悪なのである。如何に体制権力が全共闘運動を、刀づくで正統しようとして、全共闘内部に浸し、人間主義と、人民解放の思想が存在する限り正義は届くことはできない、その思想は人民内部に浸透しつゝ圧倒的の共感を獲得する。又ひとたびその思想を大衆が捉えたならば、人民戦争の大海原は、燎火そのものを燃焼して行くであろう。

歴史は戦う学生のものであり、人民大衆のものである。

Ⅰ 研究・教育の内実 V

電気工学科

過去より現在まで一貫して実施されてきた私立大学、特に私が参戦する明治大学工学部の研究・教育について語れる言葉は、研究教育と云ふ名のもとにせよ研究者 A 教育者 V の社会生活の基礎を保障し、学生として完全に資本主義体制の要請に適合した労働者 A 中堅技術者 V を機械的に拡大再生産していたのである。

に従事し、その機械的の要請をこなしてきたことは、明白な事実である。これが故にその状況を評らかにする必要があると思ふ。

研究について

まず研究体制。基盤が確立していないこと。改善すれば教授を始めとして、教員も専攻科研究員としての自己を生涯保障する確固たる信念ある。自星の欠如、真に学問研究を志す者資力が不十分であり、研究活動を強力に奨励し、遂行して行くに欠陥が欠落している事である。次に研究設備と資金の貧弱さ、少なきである。私立大学の場合、創立当初創立者個人の財源または海財で賄われてきたが、戦後教育の機会均等の理念から薄れた民主化教育はよって多数の学生を包摂し、特に理工学部においてインペーン、工業化時代に答える技術者養成のため学生急増の必要が生じた。その結果として大学の財政源は従来の拡大したそれが、逆に研究者一人当りのそれは益々不足をきたした。以上の如き現状から大学での本格的な若手研究者は養成されず、また大学自体もそれをほとんど期待していないが故に相対的に常時若手研究者の不足を招来した。

研究者の経歴として、教授層の大半は官立大学、大企業等の専攻科研究者を招聘し、あるいは公立の研究所で延び極んだ中堅研究者を迎え形だけの研究スタッフを雇い入れて、まがりなりにも電気科の研究体制を維持してきた。その研究の内実として形骸化した教授層は大学において研究活動にはほとんど従事しないか、学位を得、科長の自己の身分保障のためにのみそれを為し過去の研究業績を唯一の武器として独り占め、着陸した。そして私たち実践助手を自己の研究室に固定化させ、将来の職を保障するといふ名目の下に研究室の一切研究教育業務の指導・補助を為さしめた。実践助手が独自に自発的に研究を推進しようとするのに対し、経済的の圧力増加する。発表の自由と云ふ形においてのみ可能としても教授自身の業績となるような速名と云う形においてのみ可能である。強引に単独で発表した場合、危険な方法で日常的にその本人に圧力を掛ける。

実践助手の研究に対する姿勢は別にして、自発的でなく、不安定である。その研究はあくまで担当教授の専攻分野内で、外に発展深化せず、相互批判、褒賞する家範がほとんどない。その為余分に研究に対する希望・自信を喪失して、閉居して行くのである。また自分の勉強の一助として数年間の契約で研究は幾り、研究と云うものを儀曲化した形の技術を修得し、研究者としてよりも現在企業体が必要としている若手高級技術者の資格で企業または私大に就職する。痛感せざるを得ない点は、従来から大学において「研究とは」「……」等々の本質的問題について少しの疑問もはきまず、皮相的な疑問すら一ある研究にただ興味を持つ。「この研究は金がほとんど掛らずして短期間に成果が上がるのだ」「何か研究らしき真似事をしていれば毎日が過ぎるのだ」とか云う談話に終始して、逆に表現すれば不真面目な態度姿勢にはほとんど終始していったのである。

教育について

工学部拡充計画により、昭和三九年から四〇年に亘って神田地区校舎から生田地区に新校舎を建設し、移転した。神田地区において新設の工学部は、略校舎に無秩序に分散・存在していた教員を調整等を一箇所へ整理統合したので、外見には一応整備し便利になる。しかしながら、その内容は、学生数の急増、常に教員数の過剰性による不足、その結果教育効果の質的低下をもたらす。例として昭和三四年一学年の学生数約一三〇〇人、教員数一〇〇（実験助手をのぞく）人に対し、八年度の昭和四二年前者は約三〇〇〇人、後者は一四〇人に増員され、電機科学生の専任教員一人当りに対する学生数は約五二人から八〇人となり、学生の指導接触を益々粗雑・無縁にならしめる原因を生じた。その対応策として無節操な形で実験助手の員数を増加せしめその教育活動を担うために各教員一人と一実験助手を分離して教授の研究に關して一線を画し、研究室の学生・院生、

大学教授と云ふ職大儀の表着と特権は止揚しなくてはならないだろう。その特権を保存してきたが故に、それを悪用し腐敗墮落をこれまで進行させてきたのである。教授階級に対する批判は大衆の規模で展開しなければならぬ。その批判者集団として学生、人民大衆を登場させなくてはならないだろう。人間は弱い。大学教授と雖もその例外ではない。批判のないところには前進はない。最高知識階級には残念ながら、今まで批判者がいなかった。始めて全共闘運動の組織だけが、唯一、批判者として登場したのである。最盛期と自認してきたが故に批判者が現れることによって、非常な盛衰を帯びた。その本質を理解し、機軸を耳を傾ける覚悟もなかった。その痛みが激しかったが故に、(暴力学生)と云うレッテルを貼ることで、その痛みを感ぜようとしたのである。まさにこれこそ教授階級の墮落を促進し、大学の使命を不当に損傷してきた元凶なのである。

教授会と云う既成の組織は、被風たてなければ美しく遊んでいく。西物を添く流石にして、批判には折れてこないだろう。しかしひとたび大衆批判と言ふ清濁なものを浴びると、皆高く注視することによって、沈没された批判は、ひとたまりもなく地上を浮揚し流れてゆくであろう。又その大衆批判の情を、西物の流石を批判に容れず、空果とも思ふに及ばぬ。批判の流石が流れていくのである。

大学は、その知能階級を解き、ストリートに共に人民の幸福を追求することなく、真の人間形成の限界を知らず、進まなければならない。新しい、学問研究の自由の場として歴史に位置させなければならない。

学問・研究も結局は、人民大衆の財産なのである。

工業化学科

一口に表現するならば、工業の教育、研究は、毎年一四〇余の種(学生)を流野(卒業生)にまいて、わずかの木と四年の才木をかけて、全部だめにしてしまふ風を繰り返して来た。たまたま流野が流れていくと、全部びると、またかまもまたかまも自分で九段を建てているが、教授の版面を極めた生物というべきか。しかし、一しかないものを一〇〇と書き、一〇〇になるが、一〇〇を一〇〇ぐらいいかに表現したか。たまたま、過少計出と考へてもいい。

もう少しは普通な言葉に置き、教育の要求を理解出来ず、化学における科学を産出できないが故に、多くの学生の、やる気の芽を摘み取り、画一的に学生を生産しているのが、ペルトコンペイである。その上なまじつか、自己意識の中に、自分は真面目にやっていると、無批判的精神があるが、コンペイの生産能力をあげている。これは単に一万の生産力ではない。化学や教育に開きがある。なんでも科学的というわけではないが、工業化学教育に開きがある。つかのテーマを提出し、私たちの批判と共に読む人の批判を仰ぎたい。

規模—現在の大学制度を、一応認めの上で進んで行くこと、設置基準では一学年八〇名で計三二〇名であるが、現在は五七〇名で、これの一七八倍である。この事は重大な意義を持っており、一七八倍が及ぼす影響を少しも上り、そんな多人数を教育している行状を見てみよう。

ここでは化学教育で特に重要視している実験についてみた場合は、次の様である。

実験室名	床面積	現存人数	一人当り	設置基準
工化実験	282 m ²	70人	4.0 m ²	7.8 m ²
有機実験	311.5 m ²	70人	4.5 m ²	
定量実験	311.5 m ²	70人	4.5 m ²	

実験費—学生一人当り八、〇〇〇円の金が実験費として毎年納入され、その合計額は、四五〇万円ぐらいい、その内三六〇万円ぐらいい、工業化学科に入ってくる。その中の約三二〇万円が各研究室配分であり、大部分は研究室に集中しているのが分かる。しかも、大学院生が各研究室に在るが、そのうち多くの金が彼らのために使用されている。

さらにもう一つ、学生実験のために購入する予算としての文部省理科助成金の使用はどの様になっているのか? これを一年から三年までの直近の各年度で見た過去三〜四年間の実績は、次の通りである。

年度	購入総額	還元額	率
41	4,247,200円	155,500円	3.6%
42	6,720,700	1,199,000	16.7%
43	4,441,100	0	0%
44	約4,900,000(予定)	0	10% (予定)

結局のところ、学生のために費用を卒業生も学生であるという理由で、助手や大学院のために購入しているにすぎない。研究費が僅かしか(正式には学費補助)ないので、これらを研究室用品に充てるのは、程度定むを得ないと考へるが、学生実験の計画性即ち教育全体の具体的な取組が全くない所を、そしてそれを学ばざるべきに行なっている所が問題である。

さらに質的な意味での教育水準はどの様になっているのか。

S44年現在調

実験名	学生数	形式担当者		担当者	
		教授・助	実験助手	実験	学生
一般化実	(s43) 375	14	10	375	
定量 "	(s44) 140	8	8	18	
有機 "	(s43) 140	6	4	36	
工化 "	(s44) 280	24	16	18	

つまり表面的には人数をそろえているみただが、ほとんどの教授がここで手を抜いている事が理解できるだろう。これは次の表を見れば十分である。

学生出席出席率	(教授出席率)
100~80%	6名
80~50%	3名
50~0%	5名
実験別延べ人数	

343年度

さらにこのように出席する内でも、単にお茶を飲むだけや、雑誌に二コマ(要旨三時)の中二つ三回顔を覗かせるのが、半分近くいる事を考えると真意は、助手の仕事の負担がかかっているのが分かるだろう。(この数値は四四年四月より助手の方から申し出て、助手が責任をもってやっているものについてはomitしてない)

しかし彼らは、公式の席上では、前述の様に「自分は一生懸命やっているが、ポイントを押さえてから問題はない」と言明している。これらの事は何故そうなるかと言え、工学部基本方針委員会(内出委員)や教務委員会(工学部)の内田教授(元工学部長)が表明している様に、「大学では、費用をかけたが、いかにしたらマズい得るかが問題となっている。」と述べている事が明らかである。即ち、日大でも見られた様に、最大限にマズい化し、その金を一部に投入する事で、かろうじて、微かな利益を保っているにすぎないと言えらる。現状維持が例年と異なり、自己の過去の研究を、死蔵も惜まらず生産したが故に、他の進歩と相対化され、水準の極端な低下を呼んでいる。これは前述の事で動理解していただけるものと思う。ではその少ない金を一部に投入している研究室の数はどの様なものであったらうか? 教授九人、助手八人、院生一三人で学生一六〇人(四年生制学生が各研究室に配属される)が、人員の全部である。

しかしこれは工業化学科が、全面的に政府の政策に乗っているものとして把握しないと、重大な誤りを現出するだろう。理工系の拡大の中で、合成化学、薬品化学が逆転され、その形で工業化学科が設立された。これは工学部拡充計画の時、大塚に財界側の意見を取り入れて、人事を考えれば十分である。現状は一人の主任教授のもとで、助教授〇人、院生〇人、助手〇人、実験助手一人、院生、学生で一つの研究室が成立している。不文律的に他の研究室への無批判があり、これによって、かろうじて体面を保っているに過ぎない。そのため、研究に必要な相互批判的権威のもとで、何がし得るのであろうか。研究室における最大の権威者である教授自身の研究を考えてみよう。

その例としてここでは研究そのものの本質を、社会とどう関係で研究が行なわれるかの問題を考えたいものとして、従って現在の学会制度を「応答」の形で、従って学会の内実を別としての学会活動をみれば明治大学に赴任して来てから学会活動をほとんどしていないのは九人の中で六人、した事があるのは三人に過ぎない。

学会誌(日本化学会)の誌名(昭和)への投稿も二名であり、その他を入れても四名である。これは明大に来てからの投稿も二名であり、工業化以来九年当時から八、九年間一編もない人がいる。助手等が主にやって進名している者も、ある。の教に入れているので、もっと進少くなると思われ。その内実でもって、研究指導に当たって来たと言えざるを得ないだろう。さらに特定会社と結びついて、その研究室のメンバーに指導させる、いわゆる遊学協同も存在している。

現場所である学会活動(研究発表、討論会、講演会、各種委員会等の出席)は、貧乏なものである。本末大学に於ける同輪であるべきもの一方を欠いた、つまり過去の研究遺産を土台にしているだけなのである。研究者としての面を有している事が、最低条件である。この、教育の土台にあるはずの研究がないままに、教育が推進出来た事は、唯高貴としかいえない。

さらに教育面では、どうなのだろうか? 競争以来、私たちが、多くの学生に面談した結果は次の様なものである。

教育体制の最大の欠陥は、四年間の成果として多くの学生を同一化し、彼らの自主性を奪う事であった。これは、学問と統一性(学問)もとの体系化を全く理解していないといわなければならない。カリキュラム上に配属された科目が、独立して存在しており、統一性がないままに、学生の自主的進歩を奪った結果にあるだろう。結局学生は、カリキュラムに配属されたものを、自ら進んで消化出来ないので、与えられたものとして受け入れなければならない状態としてある。その意味で、二軍に同一化の努力を強いられるものと考えられる。

あぐくのはてに、やる気を出さず、学生に對し、政治的・学問的の質が低い、やる気がない、自分の言いつけはそうである。その状況を自分でもみだしたものと理解できず、一方的に学生に責任を転嫁している。のみならずそうしたことを学生に容れず、レベラタラシ、同一化した教育内容をおしつけ、自分達の教育方法(マズい化)も含めて一に對する一切の自己及び相互の責任をなくく拒否し、学生を能動的に再考しようと思っていない。

教育を人間の表現の問題としてとらえるならば、能力に有るべき教育ではなく、諸々の学生の意識、その方に應じた教育を追求したければならないのは、自明の事である。

こうした事が、現教育の見えない苦しみとして存在している事を忘れてはならない。

又、科学の発達で、全人民にまで普及するかの幻想を学生に与えているという、重大な認識の誤りとして考え直す必要があるだろう。超々進利潤の再分配より、利潤の存在を考えてこそ、真の化学教育であろう。どういふ風に考えれば、冒頭の教員がおおきくはなれたのが所望していただけると思う。

結語の都合があるので大部省略したが、現況の教育、研究へのことしか出来なかったが、詳細は各自発表する予定である。明大工学部工業化学科白書をみて頂きたい。

農学における環境

社会経済的な中で現在、過去を問わず一般に農業部門は他産業部門に比し軽視され、個別明治大学の中においても、農学部は他学部と比し同様に軽視されていることはいかぬ。とりわけ農学部の中で、農学体系の中にも研究、教育の場として重要な空間を有するものとして存在する機構が最も弱体化した。このように状況下での現況に於いて一〇年余、いつか隔のあたる場所として位置づけられることを期待し、その年ごの今日的課題に厳格の努力を続けたい。われわれがこの間の農業の経営状況を「農場白書」として公表しようとしていたのもその努力の一環である。その目的とするところは、研究、教育の場としての存在を明確にするためには、農学体系の中に農場をどのように位置づけるかの思考主体である。教授会員の立場に對する非合理的な関心を正し、もって新生工学農場創出をも意図するものであった。ところが大学紛争が深化するにつれ、「農場白書」も経時的に順次革命を起し、「教授会白書」へ、また「大学革命」へと脱皮してゆかざるを得なかった。この「農場」の内実こそ学生が提起し続けている本質に通じるものと考へる。

「一國の経済成長における農業の役割、その農業の役割を踏まえて三右するものは、結局、大学における農学教育の根本的研究であり、その教育のあり方いかんが、今後の経済成長に大きな影響をもちます。」この

よりに産業の経済成長に対する推進力を提供する、たとえ側面産業
の汚名は着せられても、ひとり農學関係者の独断であらうか。経済成長
の中に確たる基盤を築き、その占有階級の拡大を積極的方向づけるた
め、人材への期待をこめた農學教育をしなければならない大学の使命は
重い。大学は研究、教育および社会奉仕という三つの使命を持って
いる。「これらの使命を側面から支えるものは知識の獲得、伝達および応用で
ある。すなわち知識の獲得という側面は、研究調査の使命遂行によってあ
らわれ、知識の伝達は授業すなわち教育の使命遂行という形をとる。そ
して知識の応用は、大学の社会奉仕と同一視される。」大学農學は大学
同様の三つの使命を有することは勿論、農學教育の場として、農學系
の中では、農學部の基礎階級に対する臨床階級の場としての重要性を
持っている、と断言するのはひとりで得難きところである。農學部は科
学技術や経済学の進歩が現場において実際に適用されるチャンスを進め
ている。大学農學はこのことをまともに、総合的に研究、教育とパランス
のとれた普遍運用がなされ、日本農學の役割を果すも暗示する進歩的
經營を有する。このような現場階級が研究を果すことなくして機能し
ないことは、たんに現場階級のみならず、教育の使命遂行という形の
知識の伝達におけるその教育内容の発展およびその充實をも否定して
しまふという態度から明白であらう。このような研究こそ大学農學の健
康を維持する現場階級の研究であり、従来の現場階級における研究とは異
なるといふ論議である。このような視点から現場階級における研究とは異
が新しく想起され、現場階級を構成する諸要素として農學部農學系、作務技
術学および福生衛生学部の三階級の抽出となっている。これによって
農學部農學系は、農學部農學系、農學部農學系、農學部農學系、作務技
術学、近代化された農學部、学生の教育すなわち現場階級を果す、その
現場の一部を農學部の現場階級に提供して、それら協力することを目的
として、これが現場階級を果すこと、これら協力することを目的として、
これを比較し、「教授会階級」の代表の符号を示す。

研究部の現況からいへば、この場合研究とは既に規定したように
農學部独自のものであることはいちまでもない。本学農學部における研究
スタッフは、各階級に配属されているわれわれ農學部助手である。そして、
本来農學部独自の研究をしなければならぬわれわれは、農學部研究を考
束され、研究室における研究と同様の内容をもつもの、限られた場
の中で探求している現状である。研究部員および現場階級の両階級を中
心として、われわれは研究の生産性についても考慮してきた。このように集
約的に進出するような態度でないため、農學部独自の研究が皆無に近いの
も、自慢にはならないが、当然である。いよいよこの農學部研究のべき
い決定的な理由が、スタッフが少なく、その不勉強もさることながら、
全員自然農學系か、しかもかたよった構成から成っていることである。
八〇〇が病弱農學部員である。このことは前述のごとく、われわれの本
来の研究が農學部の性質のものであるため、社会科学系のスタッフの
必要性から容易に想像されるであらう。

教育部の現況に目を向けよう。既に研究の現況のところでも述べた
ように、それが高度に行ない得ない状況ということが判明した以上、正
常な知識の伝達、すなわち教育の使命をまっとう出来ぬことは論を待
たないであらう。また現場階級を構成する諸要素をもつ教授が農學部を担
当するのが原則である。しかるに本学農學部においては、他の専
門分野の教授が、その資格階級の文憑下に乳用し、果敢とて、現場
階級独自の責任者として進出された。現況のこのように、現場階級
専門とし、義務をまっとうして貰いたいものである。更に近年の相違
による農學部とは異なる、同じ学生が二年続けて同じ責任者に当たらない
よう時期のずれを考慮し、それらによって内容の相違とし、何ら学問
的根拠による分類ではない。時間的の混乱を方にして、単に段階的に行
なっているに過ぎず、しかもそれによって公平を欠き、生田における
講義を主とし、実習の方は従としてしかとらえていない。農學部は、ま
さに農學部重視の例でもない。このように現在農學部は、真に

農學部教育を担当出来る資格者が唯の一人も居ないことを明瞭する。
このように大学農學部、研究、教育の場として有名無実化している場
において、教育をしてきたという教授会の自負の中に、まさに許欺師會の
それを有級出来る。好むと好まざるにかかわらず、残念ながらわれわれ
もこのような状況の最悪化の感に、積極的に一翼を担ってきたことを
告白し、深く謝罪しなければならぬ。このように優れて大きな問題を
惹起した責任は何かと言え、農學部教授会の農學に対する理念の欠如、
大学農學部に対する誤った認識以外の何物でもない。このことは研究に對
する無自覚、無理解、そして派生的に現場階級（教育）に對する誤解
誤解をもとく飛鳥無雲の態度である。以上が現場階級からみた教授会の
罪状（行状の内容）の一部であり、この根柢は悪しき原点の掃とま
まにわれわれの提案を試みてきたにもかかわらず、これらの多くの問題
の発生を恐れ、隠微するために、この教授会の態度は、階級性を認
識して下さ、という厚い鉄のカーテンを引き、閉鎖的になるばかりで、
その体積のあがきを示すばかりである。そしてこれに追いつき、
政治問題に對しても大学のキャンパスを使って話し合ひしよう、二〇
月九日に候補隊を導出し、選正を加えてきた。われわれはこの挑駁を敢
然と受けて立つものである。

最後に、このような「明大的」立場にも国立大学の立場が「是非明大
ななげ」といふ、誇り得る美譽の的を置いている。それは教職員教育
である。とりわけ作務員をそれである。少ないことに眼を見たり、「た
ったこれだけの人数でこれだけやれるのだから、うちのものたちももっと奮
起してもらわなければ」といふことである。われわれの方ではせめて
選正の半分位まで何とか出来ないものかと思っている。如何に作務
員の労働強化になっているか懸念してもらいたい。

学園叛乱と自己のかわり

レポート (A)

私は戦中戦後、今から考えると貴重な青春時代を、帝國主義・軍國主
義の渦中で過ごし、戦争の最前線に亘り経験し、戦争のむなしさと
人間の哀れさを知った。人種こそ真実人間が人類を救う、このように
悪が、思想の相対から、権力の衝突から、特定の権力者の経済的欲望と文
配者意識によって戦争が行なわれて良いものであるか。学園は戦争の
ためにとか、特定権力者の利益のためとか、特定の國家のためであるの
ではなく、あくまでも人間の福祉に貢献するために存在するもの
である。この学園に、一研究に自由がなくなり、なくなりつつある。
私は過去において、自由というものが、自由思想は即
社会思想、或は「赤」といふレッテルを貼られ、当時の社会からは教人
以上の罪名を「偽善、愛國奴」といわれ、社会の内外に生活を余儀な
くされた。このような教育訓練によって、私は戦後の民主主義という
ものについても、思想問題についても深く思考することなく現在にいたっ
ている。ただ大学における学園研究の自由というものは、思想
或は特定の権力・國家・産業協同Vが介入すべきでないし、介入された
状況下で行なわれる学園研究には真理の探究はあり得ないし、どだい真
の学園とは反権力的要素を含んでいると考へてみる。

昭和四〇年頃から激化した、インテリゲンチヤ反對闘争、第一次羽田事件（
S 昭二・一〇・八）以来、日まじり騒動する学園を中心とした、青年、
学生の権力に対する闘いを知り、見本におよんで私なりに、この問題の
根柢、提議者たるこの学生の思想の発端が奈辺にあるのか、自分の
周囲のものと照合し、議論し合ってきたが、自分自身の額で受け止める
ことはできなかった。昨年（二〇月）二日第三回國庫反戦隊に、も新
にでかけ、その時は局外者として、最終電車まで、自分の目で、足で